みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中華圏の会議文化：国際人類学民族学第16回大会における文化摩擦

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5232

〔りぽーと〕

中華圏の会議文化

――国際人類学民族学第16回大会における文化摩擦――

河　合　洋　尚

1．「中国式」の会議文化

筆者は中国に留学し就業した関係で、ここ２、３年、中華圏で開かれる国際シンポジウムに招待されることが多くなった。筆者が中国で主催されるシンポジウムに参加するようになったのは、2004年度以降のことであったと記憶しているが、当初は「中国式」の学術会議のやり方に戸惑いと新鮮さを覚えたものであった。そこには確かに異文化が存在していたからである。

もちろん筆者が参加した「中国式」の学会やシンポジウムは中国華南地方が中心であり、筆者の目にしたものがそのまま中華圏全体を代表するわけではない。しかし、2007年度から現在に至るまで、筆者は、中国、台湾、シンガポールで開催された11のシンポジウムに参加したが、そのうち実に９つまで類似の方式での会議であったから、中華圏には会議をめぐる共通の「価値観」があると考えて、さしつかえないだろう。一言で言えば、「中国式」の会議は一種の「もてなし文化」である。筆者が参加した華南地方のシンポジウムでは、具体的には、次のようなやり方で準備および運営されるのが一般的であった。

（ａ）会議の発表者は、主催者（または主催機関）の個人的なネットワークを通して選定される。日本では、手紙やインターネットを通して会員に広く参加者を呼びかける（以下、これを「公募式」と呼ぶ）が、「公募式」で発表者を募ることは基本的には稀である。これは学会機構の相違とも関係があるのだろう。中国にも学会は存在するが、一般的には会費を募ることも学会誌を刊行することもしない。臨時に学術シンポジウムなどのイベントを

施行するときにのみ、学会は作動する。もっとも最近では「公募式」により発表者を集める学会やシンポジウムも現れ始めたが、その場合も、個人的なつながりから業績や人柄などを評価して発表者を選定する手法が併用される。

（b）こうして選定された発表者は、主催単位のゲスト、つまり賓客となる。ここでホスト（主催単位）とゲスト（発表者）との間に一種の贈与関係が生じる。すなわち、ホストは、お客様を迎えるわけだから、参加費をとることはしないし、会議中の食事、および宿泊費を全額負担することも珍しくない。さらに、ホスト側は、会議中もしくは会議終了後にエクスカーション（これを中国語では「参観」もしくは「考察」と表現する）をつける。こうしてホスト側はお客様を迎える万全のサービスを提供するのだが、他方で、ゲスト側はそれ相応の「お土産」を用意しなければならない。プロシーディングスという「お土産」である。ただし、ここでいうプロシーディングスとは、単なる要約ではなく論文の完成原稿である。ホスト側はこの完成原稿をもとに冊子をつくり、ゲスト側は完成原稿に基づいた発表を行う。

（c）完成原稿はもう冊子（仮の論文集）として掲載されているので、発表や議論は形式的で短い。たいていは朝早くから会議が始まり、1日目の午前中は、開幕式の挨拶と、年配の大御所による比較的長い時間をかけた基調講演がある。また、1日目には参加者による集合写真を撮影するイベントがある。シンガポール国立大学には、集合写真を撮影するためにデザインされた中庭もあり、「中国式」の会議文化における集合写真の重要性を改めて実感した（ただしこの慣習は台湾にはなかった）。1日目の午後からは、通常10～15分の発表時間で、各参加者が自身の論文を紹介する。メンツが優先されるのか、激しい批判が飛び交うことはごく稀で、相対的に和やかな雰囲気で会議は進む。発表者はテーマ別に組まれる傾向にあったが、主催者側が手配するので、参加者の意志で分科会が開かれることは、今までの経験ではなかった。

（d）シンポジウムの終了後、提出した完成原稿をどうするかという問題が残る。提出した原稿は、ISBNもISSNもついていない会議用のプロシーデ

ィングスなので、あまり業績にはならない。論文集を共著にして出版する場合もあるが、その時は審査が付くケースも珍しくないので、全員の原稿が処理されるとは限らない。改稿して他の雑誌に投稿する場合も多い。

以上の手順はあくまで筆者が中国華南地方で見聞した限られた事例に基づくものであるが、「中国式」の学術会議が日本のそれとは異なった「価値観」から開催されることは十分に分かると思う。筆者の見解では、中華圏における会議文化は、当地の「もてなし文化」と共通性がある。たとえば筆者が、ある中国のお宅を訪問した時、ホスト側は必ず食事をご馳走してくれるし、観光に付き添ってくれることはおろか、宿泊先まで提供してくれることがある。その代わり、筆者はゲスト側としてお土産を持参せねばならない。このような「もてなし文化」はホスト側に多大な負担をかけるため、筆者もフィールドワーク中は申し訳ない気持ちで一杯になり、慣れるまでに時間がかかった。だが、訪問される中国の友人宅からすれば、このしきたりは「礼儀」であり「義務」なのである。こうした意識は、会議文化にも反映されているものと考えられる。

2．国際人類学・民族学第16回大会における会議文化の摩擦

このような「中国式」の会議文化は、中華圏の学者が大多数を占めるシンポジウムでは、比較的順調に運営されているように見える。しかし、欧米や日本など外部の学者（特に中国に馴染みのない学者）が多く参与した場合、少なからずの葛藤と摩擦が生じる。2008年7月下旬に中国雲南省昆明市で開催される予定であった国際人類学民族学第16回大会（以下、「16th IUAES」と略称する）は、まさにその典型例であった。

私は2008年当時、中国広東省の嘉応大学客家研究所に勤務しており、同研究所が主催するパネル「客家の歴史と文化を解読する――文化人類学的アプローチ」の運営に関与していた。このパネルは、もともと100名近くの発表者からなる、16th IUAESでも最も規模の大きな大会の一つで、私は日本やアメリカなど中国国外との連絡を担当していた。しかし、北京の準備委員会は、当初、「中国式」の手法で準備をおこなったので、非中華圏との人

類学者との間で、次のような葛藤または不信感を生じさせることとなった。

（イ）準備委員会は、インターネットなどを通じて、「公募式」で発表者と参加者を募っていたが、同時に水面下では、各パネルの主催単位で発表者を集めさせていた。準備委員会の目的は、16th IUAESを過去最大の大会にするという壮大なものであった。そういうわけで、私の参与したパネルもまた、研究所のスタッフのコネを通じて、できるだけ多くの発表者を募っていたが、何の権限があって私が発表者の応募を担当していたのか、疑問に思う方々もおられた。

（ロ）私の担当するパネルでは、当初、食費と宿泊費をホスト側である大会本部が負担すると聞いていた。しかし、「中国式」の会議文化はただでさえホスト側の負担が大きいので、規模が大きくなればなるほど運営が困難になる。そんな矢先、2008年3月に、食費と宿泊費を各パネルで負担するよう準備委員会から指示が下された。私の担当していたパネルでは、そのような経費を負担する準備がまだできていなかったので、混乱が生じた。

（ハ）非中華圏出身の数名の学者からは、「なぜ完成原稿を提出する必要があるのか」というクレームが届いた。というのも、欧米や日本の学会では、必ずしも完成原稿を提出しないし、また、この論文が何に使われるのか（審査用なのか出版用なのか）明確に示されていなかったからである。

このように、2008年度7月に16th IUAESの延期が宣告される以前にも、準備段階においていくかの葛藤が起きていた。そして、その大きな要因として立ちはだかってきたのが、会議運営の方式をめぐる文化の壁であった。結局、中国側は、国際大会においてですら、中国式のやり方を通した（或いは通さざるをえなかった）ため、準備の過程で文化摩擦が生じることとなったのである。

もちろん、こうした文化摩擦が果たして16th IUAESの大会延期に直接つながったのか否かは不透明である。しかし、以上の出来事を通して見る経験は、文化人類学者にとって、重要な教訓を与えてくれると筆者は考える。言うまでもなく、文化人類学者は文化を探求する学問であるが、これまで人類学者の多くは周縁のコミュニティのみを「フィールド」の概念でくく

り、各国の学術会議や学術研究を、異文化の眼差しで探求することは少なかった。16th IUAESにおいてもまた、会議の方式に文化的相違が存在することを、文化を探求する文化人類学者が積極的に意識し、対処してきたわけではなかった。だが、学問のグローバル化がより一層進むと思われる将来、以上のような状況は打破されなければならない。特に、中華圏では、本文で紹介した会議文化が脱地域的に存在しており、それを理解することは、今後不可欠となってくる。異文化としての会議をいかに理解し、いかに相互の調整を行っていくかは、16th IUAESの開催が文化人類学者に与えてくれた課題であるように思えてならない。

※嘉応大学客家研究所より本文中に記載した情報の掲載許可をとっています。